

T S U B A M E S A N J O V I S I O N



一般社団法人 燕三条青年会議所
〒955-0092 新潟県三条市須頃 1-20 三条商工会議所内
TEL.0256-32-5151 FAX.0256-32-5343
E-mail: jimukyoku@tsubamesanjo-jc.or.jp
URL: <http://www.tsubamesanjo-jc.or.jp>

燕三条ビジョン

一般社団法人 燕三条青年会議所
TSUBAMESANJO JUNIOR CHAMBER INTERNATIONAL





私たちが思い描く 魅力ある燕三条ビジョン

20××年新潟県燕三条市。燕三条駅と三条燕インターチェンジは、国道8号線・国道116号線の主要道路とのインフラ整備も終わり、市内や市外へのアクセス時間が大幅に短縮された。それは通勤などの利便性だけでなく、数年前に建設された県中央基幹病院の救急救命センターへ救急搬送される際の搬送時間の短縮や、新潟市・長岡市との救急救命センターとの効果的な連携にも繋がることで救命率が上がり、安心して暮らせる住環境の向上に大きく寄与している。

また市民の医療モラル向上と県中央基幹病院による全国トップクラスの専門医療が相乗効果を発揮し、燕三条市へターンを希望する医療従事者が増えている。また燕三条市では、歴史や伝統を教え地域に誇りを持つひとづくり運動も進んでいるため、故郷の医療を支える県中央基幹病院へのUターン希望者も増え、地方都市では不可能と思われた医師不足も解決している。

さらに「子どもやお年寄りも安心して暮らせる日本一の先進医療都市 燕三条」というキャッチコピーのもと、燕三条市による全国へのPR活動も功を奏して、安心且つ安全なまちとして知られ県外からは悩める患者が絶えず訪れるだけでなく、子どもの健康を願う新婚家庭の新たな住まいとしても選ばれる魅力あるまちとなった。

産業面に目を向けると今では「MADE IN 燕三条」は金属加工のみを指す言葉ではなく、コシヒカリや多品種の野菜や果物が収穫できる農業も含めた燕三条の産業全体を指し示す意味へと発展している。日本が誇るモノづくりとして「MADE IN 燕三条」を世界へ発信し、金属加工製品だけでなくそれらの販路を活用した食品関連企業の海外販路も拡充し、先進国のみならず新興国の富裕層向けの食品としてシェアを広げている。また学校給食は燕三条市産の食物自給率が95%を超える地産地消を実現することで、子どもたちへ安全な食物を届けられるだけでなく、地元農家さんと連携した食育授業を通じ「いただきます」や「ごちそうさま」などの日本の文化を学ぶことで、命の大切さや感謝の気持ちができる教育推奨モデル地域としても注目を集めている。

さらに燕三条地域の特性を活かしたひとづくり政策も功を奏し、燕三条市出身の起業人が増え地場企業と協力し世界へ向け「MADE IN 燕三条」を発信している。そして中でも燕三条で企画製造された世界初の人工知能による自動操縦型潜水ロボットは、日本海メタンハイドレートの本格的な採掘に大きく寄与しており日本のエネルギー政策の希望となっている。

観光事業では県央地域である弥彦村・加茂市・田上町と広域連携を行い大きな成果を上げていく。世界的ブランドとなった「MADE IN 燕三条」の産業と各地域の食・文化・温泉を繋げた観光は、平日は工場見学などを目的とした経済人から、週末はリフレッシュを目的とした観光客まで多くの人々が訪れる日本の目玉地域だ。それに伴う交流人口の大幅な増加により、大型商業施設などの民間資金の流入やそれに伴う雇用の創出により、県央地域は新潟県全体の資金還流に大きく貢献している。

また数年後に予定されている道州制では、この地域は県央中核市として新潟市・長岡市・上越市に並び基礎自治体の認定を受けている。今後自らが様々な自治権を行使できることで、さらなるスピード感を持って地域の特性に合ったまちづくりを行うことができると、わくわくしながら導入を待っている状況だ。

県央中核市にはまだまだやり遂げなければならない夢が無数に存在する。魅力あるまちであり続けるために、私たち市民は常に前を向き歩み続けている。



まちづくりビジョン
TOWN PLANNING VISION

魅力あるまち

- 復元力日本一のまち
- インフラでの連携がとれたまち
- まちのたからが輝くまち
- 道州制での基礎自治体となるまち

スピード感のあるまちづくり

※近道になる
もっと魅力あるまちに!

様々な取り組み

燕三条市

三條市として行う
様々な取り組み
時間がかかってしまう
※遠回りになる

燕市として行う
様々な取り組み
時間がかかってしまう
※遠回りになる

三條市・燕市の抱える問題

- 超高齢社会を向かえる現状
- 活用インフラを活かしきれない現状
- まちのたからが埋もれている現状
- 道州制導入による消滅の危機

まちづくりビジョン

1. まちづくりビジョンの必要性

2012年日本の推計人口は年間人口減少数が28万人で過去最大、65歳以上が3000万人を超えるという急速な高齢社会がすすんでいる。更にこの地域に焦点をあて、生まれてから65歳まで地元に残る人を比率で表す「復元力」で見ると、三条市が100人中64人、燕市は71人と約30%の市民が生活拠点として選んでいないというデータが出ている。このことから燕三条地域の高齢化対策は急務と言える。このまま推移していけば、市民サービスや地場産業の衰退につながり、我々の生活に大きな影響を及ぼすことになるだろう。

人の集まる魅力あるまちづくりを目指すにあたり、「県央の玄関口」である燕三条駅や三条燕インターチェンジ付近に目を向けたい。この地域は多くの自治体が羨み恵まれたインフラが整備されているにも関わらず、三条市と燕市が包括的なまちづくりビジョンを提示できていないため、インフラを活かした理想的なまちづくりを進めることができない。それは三条市・燕市にとっては端であり境界線であることから、各々のまちづくりビジョンが一致しなければ整合性のあるまちづくりが行えないことが大きな原因であろう。やはり魅力あるまちとなるためには、恵まれたインフラを活かした「県央の玄関口」という役割を果たし、さらに燕三条地域にはどのような魅力が点在し発信できるか今一度考える必要があるだろう。

さらに未来に目を向けたとき、もし道州制が導入されれば国から州、州から市（基礎自治体）へ多くの権限が移譲される。これは地方都市を活性化させる大きなチャンスである反面、自治体の有効かつ円滑な運営ができなければ新潟市や長岡市の一部になり、先人から受け継がれてきた我々の故郷である三条市・燕市は姿を消すことになるかもしれない。

2. 県央基幹病院の持つ可能性

安心して暮らせるまちづくりとして、救急救命センターを併設した県央基幹病院の建設は県央医療圏に住む市民から大きな期待が寄せられている。それは安定的に高度な医療を供給できることだけでなく、医師不足解消という期待も大きいからだ。ただ医師不足解消に関しては県央基幹病院の建設だけでは難しく、地域の医療は地域で守るを合言葉にかかりつけ医として1次医療（外来で対処しうる帰宅可能な軽症患者に対応する救急医療）を持つことや、重篤患者の治療を優先とし救急搬送を安易使わないなどの医療モラル向上が必須である。

また県央基幹病院にどのような専門医療がどの程度のレベルで整備されるのかについても関心を持ち注視していかなくてはならない。なぜなら県央基幹病院に全国的にも高い水準の専門医療が整備されれば、我々市民が安心且つ安全な生活を送れるだけでなく、他地域からも人が集まる医療都市という大きな魅力として伝播できるからである。燕三条地域が小さい子どもからお年寄りまで安心して暮らせるまちとして認識してもらうことは、

市民の安心だけでなく居住地として選ばれる大きな魅力となり、それは復元力が高まることに繋がるはずである。

3. 県央地域が持つ「たから」の連携による可能性

魅力あるまちづくりとして、県央地域の「たから」の連携はとても重要である。各々の地域が持つ多くの「たから」を繋げ線とすることで足りないところを補い、さらなる輝きを放つことができるはずである。

まず燕三条地域で考えた場合、世界で戦う燕三条金属加工のブランド力という「たから」と世界でも戦える多品種・高品質の農作物という「たから」の連携と行うべきである。なぜなら聖域と言われる農業へも世界基準での競争が求められることになるかもしれないからだ。では今まで競争をしてこなかった農業という産業に、世界で戦える競争力を持たせるにはどうしたらよいのだろうか。恐らく競争力を高めるには競争すること以外の道はないはずである。しかし、今まで聖域として競争を求められなかった農業が、突然国際競争力のある仕組みを構築し世界へ発信できる販売力を持つことは恐らく不可能だろう。そこでブランドをすでに確立している金属加工業と農業が協働することで、モノづくりのまち「燕三条ブランド」の可能性をさらに広げることができる。まずは燕三条ブランドを使い国内での農業ブランド化をすすめる一方、農業輸出特区などを使い農業への株式会社化を認め、世界最高水準の安全性を持つ燕三条の農産物をモノづくりのまち燕三条が持つ輸出ノウハウで世界へ発信することでさらなる可能性が生まれるはずである。きっと世界の人々は燕三条の農産物を食したとき、「MADE IN 燕三条」の金属加工製品を手にした瞬間と同じ感動を味わうに違いない。

また、モノづくりの歴史から生まれたソウルフードであり観光マップも存在する背脂ラーメンやカレーラーメンという「たから」と、弥彦村の山々を初めとする温泉や神社はもちろんのこと下田地区の持つ雄大な自然など県外の人々を呼べる観光資源という「たから」を繋げ県央地域という広域な連携が実現すれば、単体では成し得ないスケールメリットを活かした魅力ある観光事業が行えるはずである。五感を刺激し堪能できる観光にはリピーターも多く、交流人口が増え企業資本の流入が起り、新たな産業の創出へ発展すれば県央地域がさらに魅力ある地域になると考える。

4. 「魅力あるまち」をゴールとした「燕三条市」という乗り物

もし「魅力あるまち」というゴールへ向かうとき、「燕三条市」という乗り物を選択したらどのような可能性があるのか考えてみたい。

燕三条駅や三条燕インターチェンジ付近はもちろんのこと、国道8号線や国道116号線を繋ぐ国道289号線も燕三条市という1つの行政区となる。そのような行政区に専門

まちづくりビジョン

医療が整備されている県中央病院の建設を考えたとき、現状よりまちづくりの可能性は無数に広がるのではないだろうか。それは燕三条駅や各主要道路と三条燕インターチェンジをフルに活用した利便性の高いまちづくりが行えるはずであり、またその実現も行政区をまたぐ現状とは比較にならないスピード感で進んでいくだろう。

また「燕三条市」という乗り物は、乗組員である市民に自然と「燕三条」というアイデンティティを宿すことになる。それは世界基準であるモノづくりブランド「MADE IN 燕三条」を名実ともに燕三条産として世界に発信できるということだ。燕三条市という土地で、燕三条産の商品を、燕三条人がつくる。まさに地に足の着いた活力を得ることで、産業界全体の活性化につながり発信力はさらに高まるだろう。さらに「MADE IN 燕三条」は金属製品のみならず、農業や食文化などと連携を行うことでさらなる相乗効果が期待できるのではないだろうか。

そして道州制が導入された際も燕三条という名称がなくなり新潟市や長岡市の一部となる心配がないだけでなく、事前に燕三条市18万人都市を運営した実績があることで、周辺の自治体との協働もスムーズに進めることができるはずである。生活圏の似ている県央地域が協働し実情に合ったまちづくりを行うことで県中央核市へ移行することで、道州制においても基礎自治体として存続でき、燕三条市がより魅力あるまちであり続けるための大きなチャンスとして活用できるはずである。

5. 地域を活かした魅力あるまちづくり

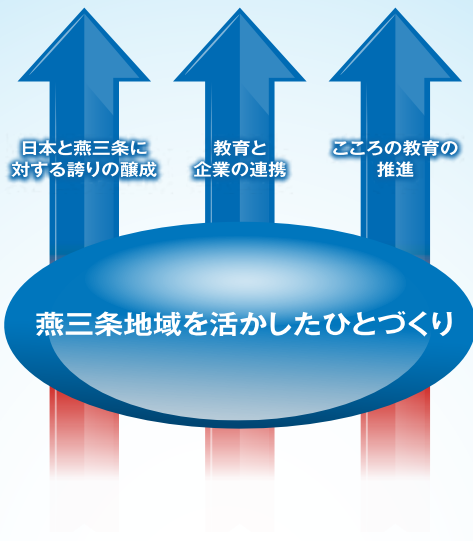
変化の激しい現代社会、現状維持を考えていると必ず衰退の道を辿ってしまう。我々が愛する故郷が夢あるまち、若者が集まるまち、安心して暮らせるまちになるために、「人が集まるまち」＝「魅力あるまち」と位置づけ、次世代が誇りを持てる日本一の魅力ある燕三条を実現させる。



ひとづくりビジョン

HUMAN DEVELOPMENT VISION

- ### 魅力あるひと
- 1. 誇りを持てる
 - 2. 和を重んじる
 - 3. 他者を思いやるこころ
 - 4. 日本独特の精神
 - 5. 地域の特性を生かした牽引力



- ### 現代の日本人の抱える現状
- 失われた日本独特の精神
 - 日本の文化を学ぶ機会の喪失
 - 利己主義・結果主義の蔓延

1. 次世代に伝えるべき日本と燕三条

大東亜戦争後、日本の文化は軍国主義の象徴として否定的に捉えられ、学校教育でもそのような指導がされている。そして現在、メディアに目を向ければ、親が子を、子が親を殺すというような悲しいニュースや、いじめや詐欺など様々な事件が毎日のように報道されている。そのような報道ばかりを耳にすると、利己主義・結果主義の考えが浸透してしまい、古き良き日本の精神性が失われてしまったのではないかとさえ感じてしまう。

しかし3.11東日本大震災という未曾有の大震災を今一度思い返してほしい。あれだけの混乱の中で日本では略奪や犯罪行為はほとんど起きず、また秩序正しく並び救援物資を受け取る尊い国民の姿は世界から称賛されたことは記憶に新しい。「荣誉を重んじ、恥を知り、礼を重んずる」^{※1}日本が誇る武士道の精神は、全世界が美しいと感じる目指すべき姿であり、その精神を私たち日本人が心のどこかにまだ残していると確信した瞬間もあった。今の危機こそ日本人が日本人の誇りを取り戻すチャンスと捉え、正しい歴史観と国家観を学ぶべきではないだろうか。

さらにこの燕三条地域に目を向ければ、全国的にも知名度の高い金属加工技術の集積地であることはもちろんのこと、信濃川の豊かな水と肥沃な大地の恵みを享受した農作物も大きな魅力として挙げられる。工業と農業が発展した燕三条は希有な地域であり、ここで育まれた精神性はこれからの燕三条を築くひとつの取り入れたいべきだと考える。

※1 著:新渡戸稲造 「武士道」より

2. 日本と燕三条に誇りを持てる和を重んじるひとづくり

日本は他国から「和の国」と称され、そして「和」とは自らの主体性を堅持しながら他と協調することを意味する。そして日本は昔から和を大切にしてきた民族なのである。家族の和、地域の和、自然との和と様々な和を重んじた精神文化があり、それは日本の文化の大きな特徴であると言えるだろう。和を尊ぶ国民として恥じない国際人となるためには、まず日本や燕三条の文化・歴史を理解し、地域に対する主体性を持つ必要がある。そのためには正しい歴史観と国家観を学ぶことが必要不可欠なのだ。

ただ現在の教育制度では、天皇制・歴史観・国家観などの日本の文化を十分に学ぶことは難しい。だからこそ学校教育では学べない日本や燕三条の文化を、家族や地域が子どもたちへ伝えていかなければならない。そのためにも責任世代である私たちが、子どもたちに正しい歴史や伝統を教え、地域に誇りを持ってもらうために自らが積極的に学んでいかなければならない。学校や塾だけでは学べない歴史や文化を知らないままでは、心から国や地域に「誇り」を持つことはできず、国や地域に誇りを持ってなければ、そこで生まれ育った自分自身に「誇り」を持つことなどできないのではないだろうか。

3. 地域の子どもは地域で育てる ～循環型教育の定着～

近年は利己主義・結果主義的な考えが蔓延し、他者を思いやる心や家族の絆が失われ虐待などが急増している。子どもたちにそのような精神性が芽生えてしまった責任は、子どもを教育する立場にある親によるところが大きい。

まずは親世代である私たちが、子どもに必要な教育や親として身に付けなければならない親学をしっかり学ぶ必要があり、子どもと親が十分なコミュニケーションを取ることが重要である。そしてコミュニケーションを考える時、決して言葉だけにこだわる必要はなく、子

どもにとっては「自分を大切にしてくれている」と感じられることや「自分の気持ちに応じてくれる」存在であることが重要なのだ。親子の関係がより密接に感じられるような信頼を築くことで、いずれ子どもは親へ尊敬の念を抱き、そして尊敬できる親をまねることで自然に人に対する思いやりの心を学べるのである。

また痛みや我慢を感じる機会が少なくなった現代では、学校教育では学べない体験型教育を地域の人々が率先して行うべきである。それにより子どもたちが自ら考え理解することは表現する力に変わり、表現する力は自身が問題にぶつかったときには乗り越える力に変えることができる。また問題を乗り越えた経験は、子どもたちの自信に変わり、自信は社会の厳しさに負けない自立した大人へと成長させてくれるだろう。

そんな地域の教育により子どもたちは強き心が育まれ、さらにそれを受け継いだ子どもたちがまた次の世代へと引き継いでいく。地域の子どもは地域で育てる循環型の教育へと発展させていき、学校教育だけに頼らないひとづくりを定着させていくべきである。

4. 教育と企業が連携するひとづくり ～燕三条人の育成～

江戸時代の和釘から始まった燕三条のモノづくりは、現在世界に誇る金属加工製品へと発展を遂げてきた。これはひとえに「変化するニーズに対応した柔軟性と愚直に品質を極める勤勉さ」を持つ燕三条の精神性によるものであろう。そのような地域の特性を活かしたひとづくりを考えたとき、今後は学校と企業が連携したプログラムが必要なのではないか。例えば世界に誇る金属加工を子どもたちに体験させることで、先人から培ってきたモノづくりの精神性と技術を肌で感じモノを生み出す喜びと難しさを体験することは、他地域では行えない燕三条だからできるひとつのひとづくりではないだろうか。

さらに燕三条地域が世界に誇るもう一つのモノづくりである農業を活用し、学校給食を安全性の高い地元食材だけで賄うことも可能ではないだろうか。燕三条地域には米だけではなく、安全性の高い多品種の野菜や果物がたくさん収穫されている。地元の農作物を使うことは地産地消を推進するとともに、地元で収穫した安全性の高い食材のみを子どもたちへ届けることに繋がる。さらに仕入農家さんと子どもたちが触れ合う機会を設ければ、食育を通じて命を頂くという意味である「いただきます」や、生産者への感謝を込めた「ごちそうさま」という日本独特の精神性を学ぶ良い機会にもなるはずである。

また、燕三条地域は人口に対する事業主の割合が非常に高い地域でもある。これは現在日本で渴望されている起業人を育てる最適な地域と言えるのではないだろうか。そして世界に誇れるモノづくりの技術力を持つ燕三条に足りないことは、技術力を生かしたアイディア(商品)だと考える。地域の特性を生かした教育を行い、次代を担う子どもたちへ起業する夢や可能性を伝え、燕三条のみならず日本を牽引する企業家である燕三条人を生み出すひとづくりを行うべきである。

5. 地域を活かした魅力あるひとづくり

私たちは世界に誇るべき文化や伝統を持つ日本人であり、日本の基幹産業であるモノづくりと多くの起業人を生み出した燕三条地域で暮らしている。そのような地域の特性を活かしたひとづくりは、燕三条地域はもちろんのこと日本に欠かせない人材を輩出することだろう。守るべき日本の文化と燕三条地域が持つ優位性を組み合わせ、魅力あるひとを一人でも多く育て日本一の魅力ある燕三条を実現させる。